彦根かるたすっぷ

い

いろは松

産湯を

る

は

春の城

梅と

さ

佐和山城

五層の天守と

人はいう

よ

夜明け前

鐘鳴りひびく

時報

鐘

や

弥生式

文化遺跡の

西今町

あ

赤備

直政

関

原

る

井伊大老

国のかべを

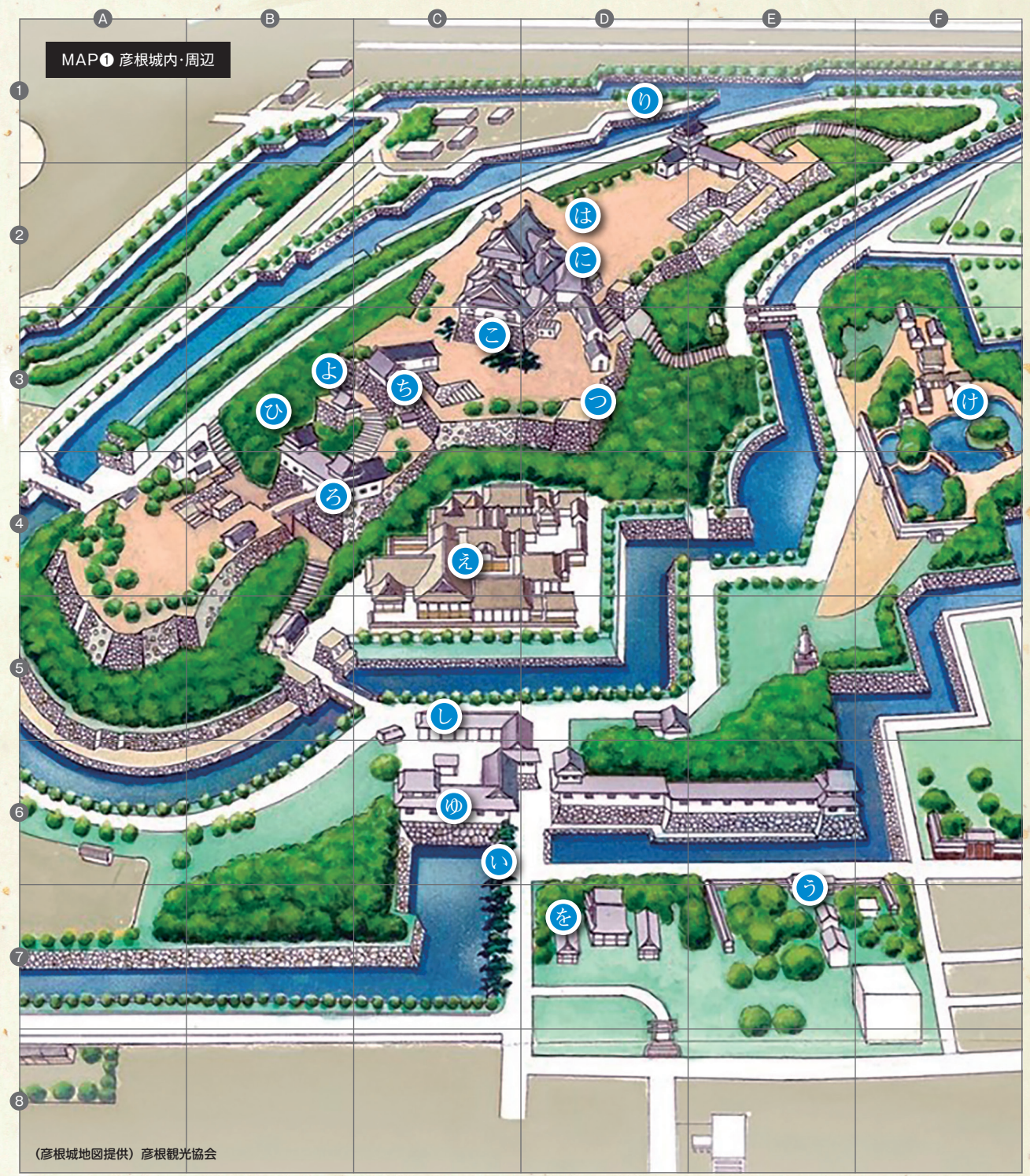
破る

企画・制作　滋賀大学

笑顔増倍宣言　彦根発 笑顔いっぱいプロジェクト

企業連携プロジェクト「彦根の熱き高校生の街おこしの夢を応援!」

（彦根城地図提供）彦根観光協会
（彦根かるた提供）あなたの本棚 天晨堂



彦根城内に関連する絵札（13枚）

ろ B-4
ろ ろうか橋 戦さになれば 落し橋

は D-2
は 春の城 梅と桜の 香ににおう

に D-2
に 西に湖 東に鈴鹿の 金亀城

ち C-3
ち ちょうなめが 古さを語る 太鼓門

り D-1
り りりしさを きたえ育てた 弘道館

よ B-3
よ 夜明け前 鐘鳴りひびく 時報鐘

つ D-3
つ 着見台 着見と月見の 見張り櫓

け F-3
け 玄宮園 近江八景の 縮図なり

こ C-3
こ ごぼう積み 天守を支えて 四百年

え C-4
え 絵姿に 四季の花咲く 彦根屏風

ゆ C-6
ゆ 雪げしき 佐和口多聞の 美しさ

し C-5
し 城内に のこる馬屋の こけらぶき

ひ B-3
ひ 秀吉の 城から移した 天秤櫓

彦根城周辺に関連する絵札（3枚）

い C-6
い いろは松 土佐の産湯を あびてくる

う E-7
う 埋れ木の舎に 偉人の あとしのぶ

を D-7
を あふみの海 磯うつ波の幾度か 御代に心を くだきぬるかな

ろ

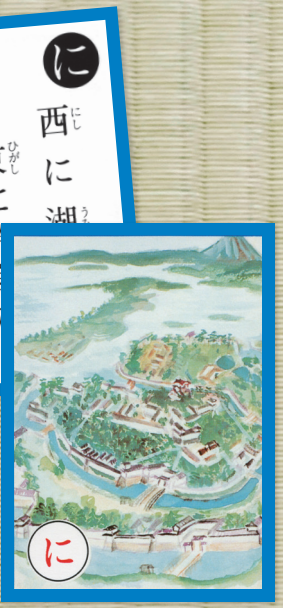
ろうか橋 戦さになれば 落し橋

MAP❶ B-4 彦根城内かるた

彦根城の防衛の要である廊下橋を下から見た様子

守りの要、国宝「ろうか橋」

国宝の一つである彦根城。本丸にたどりつくには、ろうか橋を渡らなければなりません。ろうか橋とは、屋根と両側に壁を備え、中の動きが見えない橋のことです。脚を外せば落ちるように作られており、防衛の要でした。渡った先には天秤櫓があり、突破するのは至難だったでしょう。橋の下は大堀切となっており、西の丸の大堀切とともに彦根城のすぐれた防御性を象徴する場所の一つと言われています。



に

西に湖 東に鈴鹿の金亀城

MAP❶ D-2 彦根城内かるた

遠方から見た彦根城（別名:金亀城）

地の利を生かした「金亀城」

琵琶湖の東岸に位置し、北東部に鈴鹿山系の山並みが連なる彦根。彦根はそのような琵琶湖と鈴鹿の山並みに近い陸路と湖上交通の接点で、交通だけでなく、政治・軍事上の要でした。そんな地の利を生かして彦根城は築城されました。金亀城とは彦根城の別名です。金亀城の名の由来は、彦根城が築城される前、彦根山上にあった寺に金色の亀に乗った観音像があったことだと言われています。

ち

ちょうなめが 古さを語る 太鼓門

MAP❶ C-3 彦根城内かるた

彦根城天守へと登る途中にある太鼓門櫓

彦根城最後の門「太鼓門」

国の重要文化財に登録されている、太鼓門櫓。彦根城の本丸へと続く最後の門です。櫓内には、太鼓が設置され、時を知らせる、家臣に情報を伝えるなどの発信源として重要な役割を果たしていました。ちょうなめとは、手斧でけずった跡のことをいいます。かつては彦根寺の山門を移築したとされていましたが、昭和三十一（一九五六）年から行われた解体修理時の調査で他の城の城門を移築したことが判明しました。

は

春の城 梅と桜の 香ににおう

MAP❶ D-2 彦根城内かるた

満開の桜と彦根城。毎年多くの人が花見に訪れる。

圧巻の美しさ「桜咲く彦根城」

滋賀県の観光名所として広く知られている彦根城。近江佐和山藩二代藩主の井伊直継と彦根藩二代藩主の直孝によって築城され、日本で有数の名城に数えられています。春が訪れると天守周辺に約千百本もの桜が咲きこぼれます。水辺に咲く桜が堀に映り込んだリフレクションは素晴らしい景観で、その圧巻の美しさは訪れる人々の感動を誘います。桜の開花期間中は夜桜のライトアップが行われ、春の彦根城を代表する絶景の一つです。

MAP❶ D-1 彦根城内かるた

り

りりしさを きたえ育てた 弘道館

現在は移築された弘道館（現金亀会館）の様子

藩士教育の要だった「弘道館」

かつて彦根藩校の稽古館がありました。天保元（一八三〇）年、十四代藩主の井伊直亮が稽古館の名称を「弘道館」と改めました。「弘道館」には講堂のほかに、剣術などを習う施設や諸学を学ぶ学寮があり、敷地約七千八百平方メートル、建坪約二千五百平方メートルにおよぶ大規模なものでした。十五代藩主の井伊直弼は弘道館教育を重視し、藩士教育の要となりました。現在は移築され、金亀会館として現在の中央町にあります。

MAP❶ D-3 彦根城内かるた

つ

着見台 着見と月見の見張り櫓

着見台から見た天守。街を一望することもできる。

彦根を一望できる「着見台」

彦根城で最も眺望が良い場所として知られているのが着見台です。本丸の東端に突き出た一画にあります。着見台からは様々な彦根の名所を見ることができ、例えば、昭和二十六（一九五一）年に名勝に指定された玄宮園や天正十九（一五九一）年頃から石田三成が居城していたとされる佐和山城の跡地がある佐和山などがあります。また、天気がいい日には琵琶湖や彦根の街を一望でき、長浜市や竹生島なども見えます。

MAP❶ B-3 彦根城内かるた

よ

夜明け前 鐘鳴りひびく 時報鐘

彦根城天守閣へと登る途中にある時報鐘

太鼓丸から鳴り響く「時報鐘」

彦根城に登る途中に、本丸下の太鼓丸から毎日決まった時間に鐘が鳴ります。この鐘は朝から三時間おきに、一日五回鳴ります。この風習は江戸時代から途切れることなく続いています。そして、この鐘の音は環境省の「日本の音風景百選」にも選定されています。もともと築城当時は鐘の丸といわれる太鼓丸より低い場所に設置されていたとされていますが、より遠くまで時を伝えるために現在の場所に移されたそうです。

MAP❶ F-3 彦根城内かるた

け

玄宮園 近江八景の 縮図なり

玄宮園から見た景色。正に名画のようである。

名勝の一つ「玄宮園」

玄宮園は、江戸時代に「槻之御庭」と呼ばれていたもので、延宝五（一六七七）年に四代藩主の井伊直興により造営が開始され、延宝七（一六七九）年に完成したと伝えられています。玄宮園という名前は古代中国の宮廷によって命名されたと考えられています。玄宮園は大池泉回遊式と呼ばれる構造の庭園です。この池泉回遊式というのは江戸時代に発達した様式で、池の周りを一周しながら庭園を鑑賞する仕組みです。

MAP❶ C-3 彦根城内かるた

こ

ごぼう積み　天守を支えて　四百年

長い間彦根城を支えてきた、現在の彦根城の石垣

地震に強い彦根城の石垣

彦根城の天守閣を支える石垣は一度も崩れることなく四百年以上の間も何度かの地震に耐え、天守閣を守ってきました。石垣が崩れなかった理由の一つとして、石垣の構造にごぼう積みという方法が用いられているためであると考えられていました。ごぼう積みは、表面に見える石の内側にごぼうのように長い大きな直方体の石を積み上げるという方法です。石同士の接地面が多くなるので地震で揺れても崩れにくいといわれています。

え

絵姿に　四季の花咲く　彦根屏風

彦根城博物館にある、四季を描かれた彦根屏風

国宝の一つ「彦根屏風」

彦根屏風は江戸時代初期に作成された風俗画とされており、彦根藩主の井伊家に伝えられたため、彦根屏風といわれています。昭和三十（一九五五）年に国宝に指定され、国宝の指定名称は「紙本金地著色風俗図」です。描かれた舞台は京都六条柳町の遊里といわれており、各人物の姿や細部の細かさなどから計算されつくした完成度の高い構図となっています。現在は彦根市が所蔵しており、彦根城博物館にて保管されています。

MAP❶ C-6 彦根城内かるた

ゆ

雪げしき　佐和口多聞の　美しさ

佐和口を囲むように築かれている佐和口多聞櫓

重要文化財「佐和口多聞櫓」

「いろは松」に沿った登城道の正面に佐和口があり、その桝形を囲むように築かれているのが佐和口多聞櫓です。佐和口は南の京橋口、西の船町口、北の長橋口とともに中濠に開く四つの門の一つ。表門に通じる入口として、大手の京橋口とともに彦根城の重要な城門の一つでした。重要文化財となっている佐和口多聞櫓は、佐和口に向かって左翼に伸びており、その端に二階二重の櫓が建ち、多聞櫓に連接しています。

MAP❶ C-5 彦根城内かるた

し

城内に　のこる馬屋の　こけらぶき

国の重要文化財に指定された彦根城馬屋の様子

めずらしい彦根城の馬屋

彦根城の二の丸、表門の前にある馬屋。この馬屋は、全国の城内に残る藩主の馬屋としてほかに例がなく、国の重要文化財に指定されています。L字形をしているこの馬屋は、馬立場と馬繋場の数が二十二あり、二十二頭もの馬を収容することができたようです。規模は異なりますが、表門橋から大手橋までの二段の石垣（平土居式石垣ともいう）は、江戸城、彦根城、会津若松城、上田城の他にはあまり例がない様式となっています。

ひ

吉の
城から移した
天秤櫓

ひ

秀吉の　城から移した　天秤櫓

MAP❶ B-3　彦根城内かるた

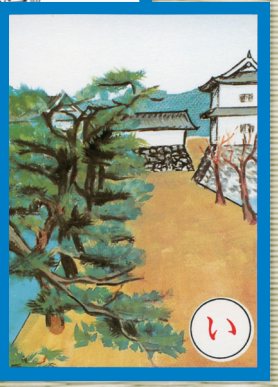
大手門と表門からの道が合流する要に築かれた櫓

天秤によく似た「天秤櫓」

表門と大手門から登った所、堀切（主に山城に用いられる防御のための土木建築物）にかかるろうか橋の前にある櫓が天秤櫓です。十二～三メートルの石垣の上にあり、その形が天秤に似ているため、天秤櫓という名がつきました。「井伊年譜」に「鐘ノ丸廊下橋多聞櫓八長浜大手門由、但楠木二三造」とあり、天秤櫓は秀吉が羽柴氏になった後、天正二（一五七四）年から築城を始めた長浜城から移築したものといわれています。

い

いろは松
土佐の産湯
あびてくる



い

いろは松　土佐の産湯をあびてくる

MAP❶ C-6　彦根城周辺かるた

佐和口多聞櫓へと向かう通りの松並木の様子

四十七が由来の「いろは松」

彦根城築城の際に植えられた「いろは松」。二代目藩主の井伊直孝が人馬や車などの通行の邪魔にならないよう、根が地表に出てこない土佐の松を選んだそうです。彦根かるたではそれを産湯に例えています。本来、木は敵方が攻めてくる際に隠れることができ、鉄砲を構えられることから、城の堀端には木を植えないのが築城の常識でした。それにもかかわらず、なぜここに松を植えたのかは書かれたものもなく、定かではありません。

う

埋れ木の舎
偉人
あとしのぶ

う

埋れ木の舎に　偉人の　あとしのぶ

MAP❶ E-7　彦根城周辺かるた

第15代藩主井伊直弼が若き日々を過ごした屋敷

直弼が十五年過ごした「埋木舎」

十五代藩主の井伊直弼は十七歳から三十二歳まで、三の丸尾末町の屋敷で過ごしました。世に出ない自分を花の咲かない埋もれ木に例え、「世の中をよそに見つつも埋木の埋もれておらむ心なき身は」とうたい、屋敷を「埋木舎」と名付けたのです。そのような生活の中で直弼は和歌、国学、国際情勢などの「文」と居合術、柔術、武術などの「武」の文武の修練に励みました。これらの修行が後に大老になる直弼の力となったのです。

を

あふみの海
磯うつ波の幾
御代に心を
くだきぬるかな

を

あふみの海　磯うつ波の幾度か　御代に心をくだきぬるかな

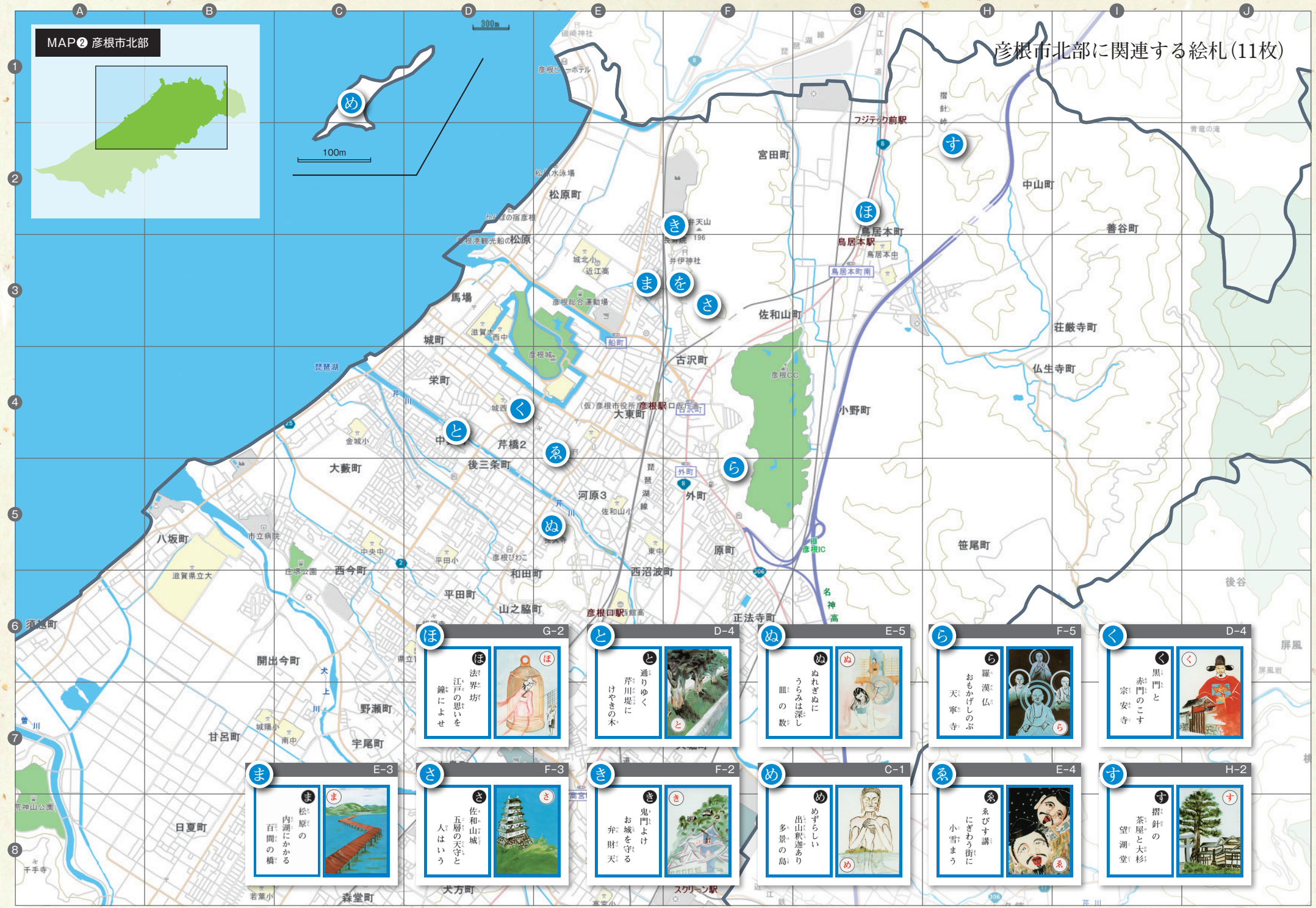
MAP❶ D-7　彦根城周辺かるた

いろは松のそばに建つ井伊直弼の歌碑

清涼寺に納めた直弼の歌

「琵琶湖の波が、打ちくだけてはひき、また打ちくだけてはひくことを何回も繰り返しているように、世のために幾度となく心を砕いてきた。しかし、わたしは国の平和と安心を願って、国政に全身全霊を尽くしてきたので悔いは残らない」という十五代藩主の井伊直弼の心境を表した歌です。万延元（一八六〇）年一月、直弼は狩野永岳に自分の肖像画を描かせ、この歌を書き添えて、井伊家菩提寺の清涼寺に納めたと伝えられています。

彦根市北部に関連する絵札（11枚）



©GeoTechnologies, Inc. © PASCO CORPORATION

ほ

法界坊
江戸の思いを
鐘によせ

MAP❷ G-2 彦根市北部かるた

ほ 法界坊 江戸の思いを 鐘によせ

上品寺に建つ「法界坊の鐘」をつるした鐘楼

努力が実った上品寺の鐘

彦根市の近江鉄道・鳥居本駅から米原の方へ約三百m、左側に上品寺があります。江戸時代後期、上品寺の住職となった法界坊が精進して本堂を建立しましたが、鐘がありませんでした。法界坊は決心して江戸に出て、市中をたく鉢して回ります。その法界坊の心に感動した花魁の花扇・花里の姉妹は浄財集めの先頭に立ちました。そのような努力が実を結び、明和六(一七六九)年に鐘が完成すると法界坊は台車に乗せ、上品寺まで引き帰りました。その鐘には花扇、花里の名とともに寄進した人の名が刻まれており、今も上品寺に残されています。

MAP❷ D-4 彦根市北部かるた

と 通りゆく 芹川堤に けやきの木

けやきが立ち並ぶ芹川沿いの様子

城下町南の防衛線「芹川」

多賀町の山間部を南西に流れる芹川。かつては「いさや川」と呼ばれ、万葉集の歌にも詠まれています。現在の彦根市内の流路は、慶長八(一六〇三)年、彦根城の城下町建設の際に近江佐和山藩二代藩主の井伊直継が付け替えたものです。この付け替えによって城下町建設の用地が確保され、また芹川は城下町の南の防衛線となりました。その後、護岸のためエノキやサクラなどが植えられ、現在は地元市民に親しまれている散歩道となっています。

ぬ

ぬれぎぬに
うらみは深し
皿の数

MAP❷ E-5 彦根市北部かるた

ぬ ぬれぎぬに うらみは深し 皿の数

彦根に伝わる「番町皿屋敷」の皿が残る長久寺

「お菊の皿」が残る長久寺

芹川の南に長久寺があります。長久寺には「お菊の皿」という物語が伝えられています。主家の大事な皿を割ったとして、ぬれぎぬをきせられ、愛する主人に切られたお菊。主人はその亡霊に悩み続けるという物語。戯曲「番町皿屋敷」はこの物語に由来し、他にも似通った物語はありますが、皿が現存するのは長久寺だけです。本堂(観音堂)は県指定の有形文化財であり、また毘沙門天立像や不動明王立像は市指定の有形文化財です。

ら

羅漢仏
おもかげしのぶ
天寧寺

MAP❷ F-5 彦根市北部かるた

ら 羅漢仏 おもかげしのぶ 天寧寺

秋には萩の花が咲き、萩の寺とも呼ばれる天寧寺

五百羅漢像がある「天寧寺」

名神高速道路の彦根インター近く、小高い丘に曹洞宗の寺院である天寧寺があります。十一代藩主の井伊直中が建設を行ったとされ、伝承によると、腰元の若竹を藩の法度として死罪に処したところ、間違いだったことが判明し、追善供養のために建立したそうです。そのような井伊家ゆかりの寺院で、十九世紀前半(文政・天保年間)に京都の仏師である朝運によって作られたとされている五百羅漢像などで知られています。

と

通りゆく
芹川堤に
けやきの木

彦根市北部かるた

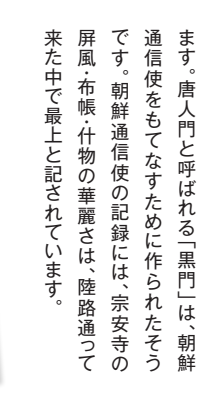
く 黒門と赤門のこす宗安寺

元禄の大火で焼け残った赤門が聳え立つ様子

陸路の最上「宗安寺」

現在、キャッスルロードと呼ばれる本町通りの中ほどに宗安寺があります。彦根藩初代藩主の井伊直政の正室であった東梅院が安国寺を再興したのが始まりで、もともとは箕輪城下（現・群馬県高崎市）にあった足利尊氏、足利直義開山の寺でしたが直政とともに、高崎城下、佐和山城下、そして彦根城下へと移ったものです。「赤門」と呼ばれる朱塗りの表門は佐和山城大手門を移築したもので、元禄の大火で唯一焼け残り、現在の本堂は江戸時代中期に長浜城付属御殿を移築したものです。徳川の将軍が替わるごとに祝賀のため朝鮮国から来朝していた朝鮮通信使は江戸時代に十二回来日し、十回は江戸を往復していますが、彦根はいずれの回にも宿泊先として選ばれています。宗安寺は彦根を訪れた朝鮮通信使の宿舎となっており、朝鮮王像が残されています。唐人門と呼ばれる「黒門」は、朝鮮通信使をもてなすために作られたそうです。朝鮮通信使の記録には、宗安寺の屏風・布帳・什物の華麗さ、陸路通って来た中で最上と記されています。

MAP❷ D-4



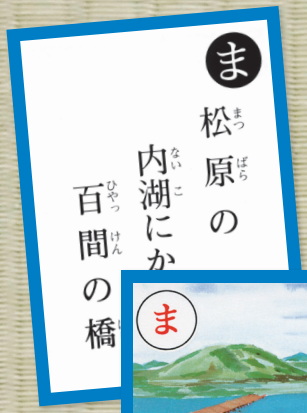
MAP❷ E-3 彦根市北部かるた

ま 松原の内湖にかかる百間の橋

昭和の時代まで所在した百間橋の跡

兵糧運搬の要「百間の橋」

石田三成公が内湖に架けた「百間の橋」。万一の場合の兵糧運搬の便として、軍略上の要として機能したそうです。関ヶ原合戦後、井伊家が彦根に入り佐和山城は取り壊されます。その際に経済性のある百間橋は残されたものの彦根城下の整備で街道筋が佐和山の南を通ることとなり、北側のルートは次第に寂れていきました。ですが、百間橋は昭和の時代まで残りました。



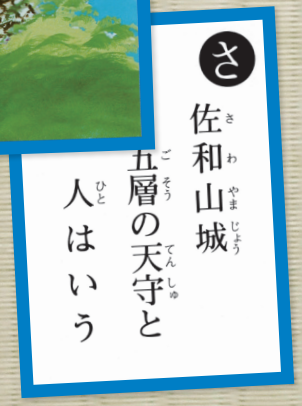
MAP❷ F-3 彦根市北部かるた

さ 佐和山城五層の天守と人はいう

彦根駅の北側にある佐和山の様子

三成が城主だった「佐和山城」

佐和山城址は彦根駅の北側、佐和山にあります。交通の要衝であったことから、この場所を押さえることで国の東西交通を掌握できると考えられ、佐和山はいつの時代でも戦略的・政治的に重視されました。秀吉が天下統一すると石田三成が佐和山城主となりました。三成は佐和山城に大改修を行って、山頂に五層の大天守を持つ城を築城しました。関ヶ原の戦いの後、初代藩主の井伊直政がこの地に封ぜられ、佐和山城は廃城となりました。



き

鬼門よけ
お城を守る
弁財天

MAP❷ F-2 彦根市北部かるた

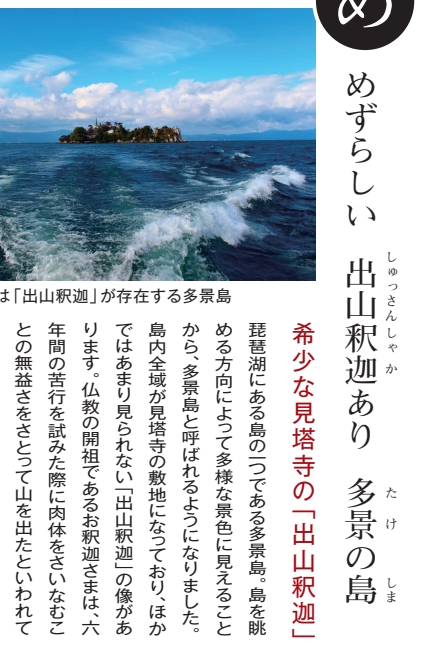
き

鬼門よけ　お城を守る　弁財天

彦根日光と呼ばれる権現造りの優美な本堂

彦根城の鬼門に建立「弁財天」

大洞弁財天（長寿院）は、元禄八（一六九五）年に四代藩主の井伊直興が、領内の安泰と彦根藩領内のかつての古城の主だった一百三十七人を慰霊するために、日光東照宮を修造した大工を使って彦根城の鬼門に建てたもので、権現造りの優美な本堂は彦根日光とも呼ばれます。ここに参拝すれば三百八十一箇所に詣でた功徳があるといわれています。権現造りの本殿は重要文化財、他の御堂は県指定の文化財です。



め

めずらしい
出山釈迦あり
多景の島

MAP❷ C-1 彦根市北部かるた

め

めずらしい　出山釈迦あり　多景の島

島内には「出山釈迦」が存在する多景島

希少な見塔寺の「出山釈迦」

琵琶湖にある島の一つである多景島。島を眺める方向によって多様な景色に見えることから、多景島と呼ばれるようになりました。島内全域が見塔寺の敷地になっており、ほかではあまり見られない「出山釈迦」の像があります。仏教の開祖であるお釈迦さまは、六年間の苦行を試みた際に肉体をさいなむことの無益さをさとって山を出たといわれており、「出山釈迦」の像はその様子を表現した像だと知られています。

ゑ

ゑびす講
にぎわう街に
小雪まう

MAP❷ E-4 彦根市北部かるた

ゑ

ゑびす講　にぎわう街に　小雪まう

商売繁盛を願って行われる「ゑびす講」の様子

彦根がにぎわう「ゑびす講」

秋の季語、「ゑびす講」。百年の歴史をもち、全国で商売繁盛を願って行われます。彦根では、十月下旬、銀座商店街・中央商店街・登り町グリーン商店街旧城下町で、それぞれ趣向を凝らして「ゑびす講」と称して大売出しが行われます。道路は歩行者天国として開かれ、沢山の屋台やバザー、イベントが繰り出し盛り上がります。かつては「彦根のゑびす講は日本一」と言われました。ぜひ「ゑびす講」の時期に彦根を訪れてみてください。

す

摺針の
茶屋と大杉
望湖堂

MAP❷ H-2 彦根市北部かるた

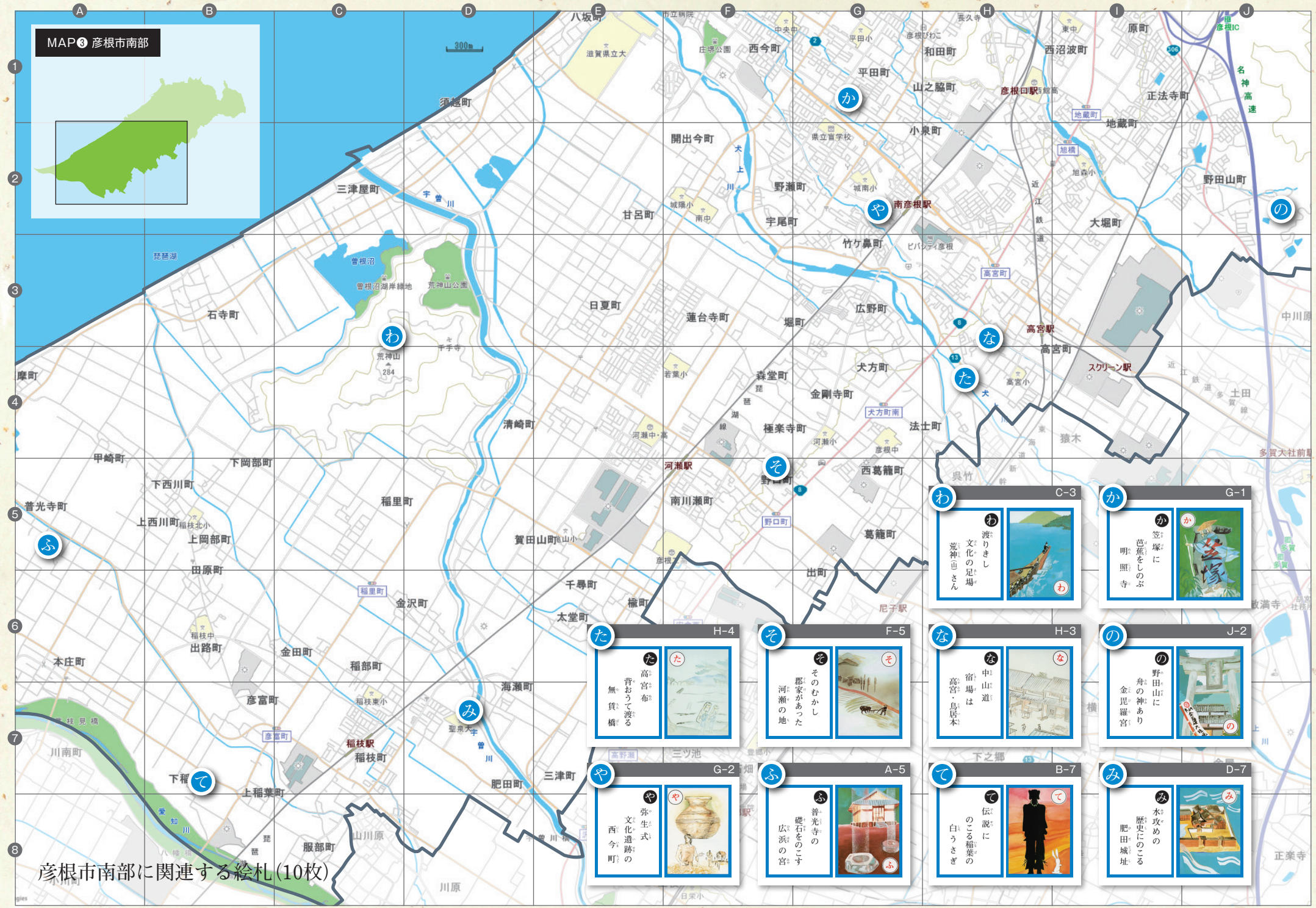
す

摺針の　茶屋と大杉　望湖堂

平成3（1991）年に火災により焼失した望湖堂

名の由来は弘法大師の歌「望湖堂」

中山道宿場町の番場（米原）から鳥居本宿に行くと摺針峠があり、それを登っていくと琵琶湖を一望できる絶景が広がっています。その場所に望湖堂があります。弘法大師（空海）はそこに訪れ、「道はなほ学ぶることの難からむおのを針とせし人もこそあれ」という歌を詠み、杉を植えたといいます。大きく伸びていた杉は現在残ってはいませんが、この歌から峠の名前が生まれ、今もその名で呼ばれています。

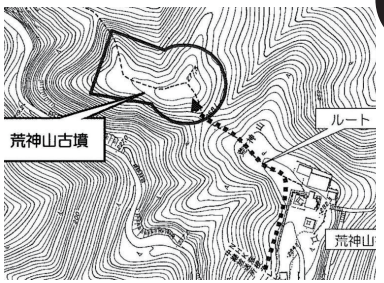


©GeoTechnologies, Inc. © PASCO CORPORATION

わ

渡りきし　文化の足場　荒神(山)さん

MAP❸ C-3　彦根市南部かるた



滋賀県下第二の規模を誇る荒神山古墳の地図

文化の遺産「荒神山古墳」

彦根市の荒神山周辺には古墳が多く、特に滋賀県下第二の規模を誇る前方後円墳の荒神山古墳があります。この遺跡やその周辺からは弥生土器の破片などが出土しています。はるか昔、若狭から農耕の地を求めて移住し、文化を運んだ人々が琵琶湖を渡るときの目標とし、暮らしの場を広げる拠点とした一つが荒神山だったそうです。荒神山で発掘された多くの土器、装身具などは周辺の寺や学校に保管されています。

わ

渡りきし
文化の足場
荒神(山)さん

か

笠塚に　芭蕉をしのぶ　明照寺

MAP❸ G-1　彦根市南部かるた

南彦根駅から徒歩で20分ほどに所在する明照寺

芭蕉の句が残る「明照寺」

明照寺は、浄土真宗本願寺派の寺院です。南彦根駅から徒歩で二十分ほどの場所にあります。第十四代住職の李由は芭蕉に師事したすぐれた俳人でした。元禄四(一六九一)年十月、芭蕉は明照寺を訪れ、李由に桧笠を形見として与えました。それを埋めて笠塚とした句碑には、芭蕉が庭園を鑑賞しながら「百歳の気色を庭の落葉かな」と詠んだ句が残されています。笠塚は今も明照寺の庭園にあります。

か

笠塚に
芭蕉をしのぶ
明照寺

た

高宮布　背おうて渡る　無賃橋

MAP❸ H-4　彦根市南部かるた

中山道高宮宿の入口に位置する「無賃橋」

無料で通行できた「無賃橋」

高宮布は、彦根市の高宮付近で産出される良質な麻織物です。江戸時代、彦根藩は高宮布を保護し、将軍家への献上品としていました。湖東地域で生産された上質な麻布の集積地であった中山道高宮宿の入口に位置するのは「無賃橋」です。正式名称は「高宮橋」ですが、天保三(一八三二)年に高宮宿の有志が彦根藩より高宮橋株を買取り、無料で通行ができるようになった経緯から「無賃橋」と呼ばれるようになったそうです。

た

高宮布
背おうて渡る
無賃橋

河瀬大和守秀宗が築き、居住していた甘呂城の跡

南川瀬に残る河瀬城の跡

郡家というのは郡司と呼ばれる国司の下で、各郡を治める地方官が政務を行う役所のことです。現在の南川瀬町のあたりは、一五〇〇年代前半に居城した河瀬大和守秀宗が治めていました。現在、この河瀬大和守秀宗が居城していた河瀬城は荒廃してしまいました。しかし河瀬神社付近には今でも城郭遺構が残っており、河瀬神社とその周囲の住宅の周辺に河瀬城があったのではないかとされています。

そ

そのむかし　郡家があった　河瀬の地

そ

そのむかし
郡家があった
河瀬の地

彦根市南部かるた

な 中山道 宿場は高宮・鳥居本

中山道の宿場町、鳥居本宿の現在の様子

江戸と京都を結ぶ中山道

中山道は江戸時代に整備された五街道の一つで、江戸の日本橋と京都の三条大橋を内陸経由で結ぶ街道です。現在の都府県では、東京都・埼玉県・群馬県・長野県・岐阜県・滋賀県・京都府に該当する地域を通過しています。南回り・太平洋沿岸経由の東海道に対して、中山道は北回り・内陸経由で江戸と京都を結び、江戸から草津まではおよそ百二十九里（約五百七・七㎞）、六十七の宿場（六十七次）があります。また、江戸から京都まではおよそ百三十五里（約五百二十六・三㎞）です。彦根市内の鳥居本は六十四次、高宮は六十五次に当たります。鳥居本から高宮の間、「芭蕉の昼寝塚」や万葉集に登場する鳥籠山と芹川などがあり、古道を歩くにふさわしい歴史を感じることができます。高宮宿は現在も多賀大社への大鳥居をシンボルとして、商店街が立ち並ぶ活気ある町で、江戸期栄えた宿場町としての名残あるウダツや袖壁のある商家や民家が連なりを見せています。現在、県内では米原を基準として西は国道八号線、東は二十一号線が中山道にそっています。

高宮

鳥居本

MAP❸ H-3

な 中山道 宿場は 高宮・鳥居本

の 野田山に 舟の神あり 金毘羅宮

MAP❸ J-2 彦根市南部かるた

野田山にある「金毘羅宮」の本堂の様子

山に船の神祀る「金毘羅宮」

彦根市の野田山にある金毘羅宮。交通安全・学業成就・ぼけ封じなどのご利益のある寺として、多くの祈願者が参拝しています。境内には、樹齢千二百年を超える三本杉があり、厳かな雰囲気を感じることができます。古くから船の神、海上安全の神を信仰していることが知られていますが、なぜ琵琶湖から遠い町の山に位置しているのかは誰も知りません。知られていない歴史があるのでしょうか。

の 野田山に 舟の神あり 金毘羅宮

や 弥生式 文化遺跡の 西今町

MAP❸ G-2 彦根市南部かるた

現在は福満公園となっている福満遺跡の様子

弥生時代から残る文化遺跡

南彦根駅から西の方に広がる地域に弥生時代や奈良時代の住居やお寺などの遺跡が合計で九個も残っています。その九個の遺跡というのは福満遺跡・品月戸遺跡・横地遺跡・竹ノ鼻廃寺・山之脇遺跡・東沼波遺跡・堀道跡・蓮台寺遺跡・椿塚古墳です。いくつかの遺跡は公園になっていたりしますが、彦根という町が弥生時代から続く歴史のある街だということが分かります。ぜひ訪れてみてください。

や 弥生式 文化遺跡の 西今町

彦根市南部かるた

ふ 普光寺の礎石をのこす 広浜の宮

現在も残されている「塔心礎」の様子

白鳳寺院の痕跡「塔心礎」

彦根市普光寺町にある広浜神社（別名：廣濱神社）に、彦根市指定文化財の「塔心礎」が残されています。普光寺廃寺は、広浜神社一帯に建立されていた白鳳寺院のことです。白鳳寺院は七世紀後半に建てられた古代寺院で、市内には普光寺廃寺の他に五箇所でその痕跡が確認されています。周囲には「堂畑」「堂ノ北」「大伝」など寺に関する小字名が残っており、寺院があったことが推察できます。「塔心礎」は、塔の中心部を貫く心柱の基礎で、塔の他の礎石に比べて大きなものが使われるため、塔がなくなった後でも「塔心礎」のみ現位置に残される事例が多く見られます。広浜神社にある「塔心礎」は、辺長が約二mの隅丸の方形の内部に直径約八十五cmの柱穴が掘られているという白鳳期の形態的特徴があるため、広浜神社一帯にあったとされる白鳳寺院の痕跡が確認できる重要な資料です。

MAP❸ A-5

MAP❸ B-7 彦根市南部かるた

て 伝説に のこる稲葉の 白うさぎ

神話「稲羽の白兎」の舞台とされている稲葉神社

舞台は彦根「稲羽の白兎」

日本最古の書物「古事記」に「稲羽の白兎」という神話があります。この神話は、JR稲枝駅近くの彦根市下稲葉町が物語の舞台だという説があります。寺田所平著書「稲枝の歴史」では、稲葉神社の大燈籠の火袋の台石の四面に、波に浮かぶ兎が掘られており、また地名や土地の状況が神話とよく合致しているため、神話に登場する稲羽はこの稲葉で、昔の人もそう信じていたとしておられます。

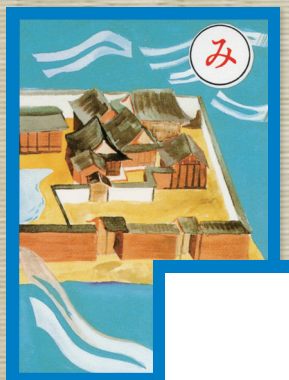
MAP❸ D-7 彦根市南部かるた

み 水攻めの 歴史にのこる 肥田城址

肥田町にある石碑「肥田城水攻め堤跡」の様子

日本初の水攻め「肥田城」

現在、彦根市の肥田町にある肥田城址。応仁の乱以降の近江国では、京極氏と六角氏が東西に分かれて対立していました。肥田城城主だった高野瀬氏は、六角氏から京極氏に代わって湖北を治めていた浅井氏に味方しました。それに六角氏は怒り、水攻めを決行。落城寸前かと思われた時、豪雨で土手が決壊し、六角氏は退却しました。これが歴史上初めての水攻めだと言われています。



へ　へいや門　むかしをしのぶ　武家屋敷

彦根市歴史かるた

彦根城近くにある旧池田屋敷長屋の様子

彦根に残る江戸時代の跡

彦根市では今も、旧西郷屋敷（三千五百石）・旧鈴木屋敷（三百五十石）・旧池田屋敷（百八十石）の長屋門や芹橋町に残る旧足軽屋敷、城町の旧広田家（屋号：納屋七）、本町に残る魚屋の井戸など、いたるところに江戸時代の建造物が多く残されています。そのような建造物の位置や構えに、江戸時代の城下町の姿が見えて、歴史の跡を身に染みて感じることができると思います。ぜひ彦根に残った歴史の跡を訪れてみてください。

る　留守居役　桜田門の　知らせ聞く

彦根市歴史かるた

旧彦根藩最後の藩主を称えた「井伊直憲公顕彰碑」

知られていない直弼の真意

黒船来航から五年後、幕府の大老に就任した十五代藩主の井伊直弼は「安政の大獄」などの厳しい面が知られていますが、安政六（一八五九）年に開国の真意が汲まれない悲しみから、「春あさみ野中の清水氷いて　底の心を汲む人ぞなき」という歌を詠んでいます。しかし最後まで直弼の真意は知られず、万延元（一八六〇）年、桜田門前で政治体制に不満を持った武士に直弼は暗殺されてしまいます。これが世に言う「桜田門外の変」です。

れ　歴代の　藩主に　直の字を伝え

彦根市歴史かるた

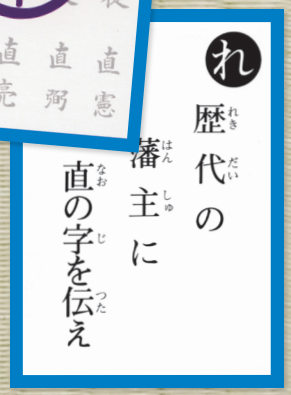
彦根藩歴代藩主

①直政（なおまさ）　②直孝（なおたか）　③直澄（なおすみ）　④直興（なおおき）　⑤直通（なおみち）　⑥直恒（なおつね）　⑦直治（なおはる）のち直該（なおもり）　⑧直惟（なおのぶ）　⑨直定（なおさだ）　⑩直禔（なおよし）　⑪直定　⑫直幸（なおひで）　⑬直中（なおなか）　⑭直亮（なおあき）　⑮直弼（なおすけ）　⑯直憲（なおのり）

歴代藩主の名前。全員に「直」の字が使われている。

初代から続く「直」の字

初代藩主の井伊直政から彦根藩の藩主を務めていた井伊家。なんと歴代の彦根藩藩主、全員の名前に「直」の字が入っています。「直」とはまっすぐで曲がっていないさまを表した漢字です。時代に真摯に向き合う藩主のあり方は、まるで「直」の字のようですね。「名は体を表す」の実例です。



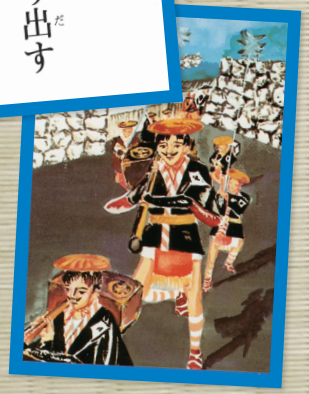
ね　年一ど　市民がくり出す　城まつり

彦根市歴史かるた

秋を彩る「ひこねの城まつりパレード」の様子

彦根の秋を彩る城まつり

彦根の秋を彩るイベント「ひこねの城まつりパレード」。十五代藩主の井伊直弼の生誕を記念して、市内学校の生徒・学生によるマーチングバンド、子ども大名行列、子ども時代風俗行列や、彦根らしさを組み入れた彦根町火消し列、一文字笠列、井伊の赤鬼家臣団列など、総勢千名が時代絵巻さながらに彦根城下を練り歩く、華やかで盛大なパレードです。毎年十一月に開催されていますので、ぜひその時期に彦根へ訪れてみてください。

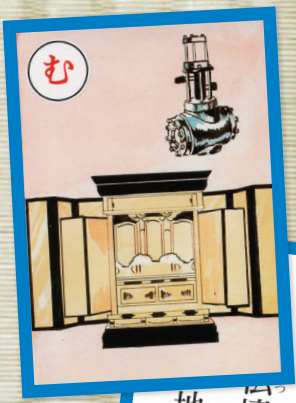


む むかしより 仏壇バルブの 地場産業

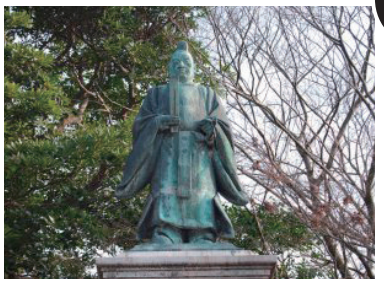
「彦根仏壇 工房見学&工芸体験ツアー」の様子

今も続く彦根の地場産業

彦根の地場産業に仏壇製作とバルブ工業があります。仏壇製作は彦根仏壇と呼ばれ、武具一般の塗装技術の需要低下から仏壇製作に移ったことが始まりです。また、バルブ工業は明治時代初期に先覚門野留吉翁がカラン作りを開始したことが始まりで、彦根バルブと呼ばれ、今でも彦根に多くの製作所があります。すぐれた立地条件のなかった彦根でこれらの産業が栄えたのは、先人の努力の証だといえるでしょう。



る 井伊大老 鎖国のかべを 打ち破る


金亀児童公園内に建てられている井伊直弼の銅像

開国の決断をした井伊直弼

江戸幕府が成立し、すぐに鎖国体制となりました。嘉永六(一八五三)年にペリーがアメリカから来航し、翌年に日米和親条約が締結されたことで、日本にアメリカ領事館ができました。そしてアメリカ初代駐日大使のハリスが要求した通商の自由を求める条約に対して、天皇の許可は出ていませんでしたが大老であった十五代藩主の井伊直弼が決断し、日米修好通商条約が結ばれました。

あ 赤備え 直政武勇の 関ヶ原

JR彦根駅西口のロータリーにある井伊直政公像

井伊直政が採用した赤備え

彦根藩の初代藩主である井伊直政。関ヶ原の戦いでは家康本軍に随行し、東軍指揮の中心的存在として戦勝に尽力した功により、近江国佐和山藩(彦根藩)十八万石を与えられ、その後の井伊家の繁栄に寄与しています。〇〇備えというのは戦国時代から江戸時代にかけて行われた、構成員が使用する甲冑や旗などを同じ色で統一する軍団編成の方法です。直政は武勇に秀でた武将が率いる精鋭部隊に採用されることが多かった赤備えを使っていました。

彦根市歴史かるた

お

往来に　巡礼行きかう　彦根寺

彦根山に登る前に登山者が立ち寄った連着町の腹痛石

今もにぎわう御幸道

彦根城築城前、観音菩薩をお祀りする彦根山西寺がありました。平安時代の歴史書である扶桑略記には、摂津国の徳満という僧が、失明していた両目を開いたという話が伝わり、白河上皇や大臣などの多くの人々が参詣され、御幸道（巡礼街道）はとても賑わったと書かれています。観音菩薩像は、築城時に北野寺に移されました。御幸道はベルロードの名で呼ばれ、今も市民に親しまれ栄えています。

彦根市歴史かるた

も

もり上がる　大薮おどりは　ヨイトコセー

彦根の郷土芸能の一つ「大薮おどり」の様子

彦根に残る郷土芸能の踊り

大薮踊りは、今に残る郷土芸能の一つです。江戸後期の様式の踊りで、傘を手に持ち、老若男女こぞって「町づくし音頭」や「日でり音頭」を鐘や太鼓の囃子方にあわせて踊ります。この踊りは、豊作や大漁を願い祈る人々の心の表れだといわれています。彦根では、他にも小泉町の幌踊りや小野町の太鼓踊り、高宮町のかぼちゃ踊りなど、たくさんの郷土芸能の踊りが残っています。現在も、こういった踊りを残すために彦根市民は保存に努めています。

もり上がる
大薮おどりは
ヨイトコセー

彦根市歴史かるた

せ

製糸所の　歴史を語る　平田川

「八重桜」が咲き誇る平田川の様子

彦根を支えた製糸場

明治十二（一八七八）年、明治維新後に職を失った旧武士層のための「士族授産」を目的として、平田村に県営彦根製糸場が完成しました。富岡製糸場で製糸技術を学んだ女工たちが雇われ操業が始まりました。滋賀県が経営していた時期の彦根製糸場は、生糸の生産を行っただけでなく、製糸技術の普及にも力を入れました。製糸技術の普及こそが、県営彦根製糸場の中心的な任務だったのです。彦根製糸場は湖東地域の模範工場としての役割を果たしました。

彦根市歴史かるた

彦

彦根に学び　彦根に育つ　ふるさと研究友の会

桜が咲きこぼれる国宝「彦根城」の様子

彦根少年少女ふるさと研究友の会

先人はここをこう築き、こう生きてきた。郷土の歴史を学びながら、先人の生き方に学んで、郷土を理解し愛着と誇りをふくらませる。そして自分を築き歴史を創る人となって生きる。私たちは、こんな願いで昭和五十三（一九七八）年から三年巡の学習と実践を続けている。総体、国体のお城ガイド、拓本作り、そしてこのかるた作りも、その一こまである。（彦根少年少女ふるさと研究友の会「彦根かるたしおり」）

彦根に学び
彦根に育つ
ふるさと研究友の会

MEMO

MEMO

彦根かるたまっぷ

彦根かるたまっぷ

取材・執筆・撮影
滋賀大学：川端　一輝　西川　慧　松井　莉瑚
松崎　大蔵　山本　大葵　山本　春季
近江高等学校：吹田萌望愛

彦根かるた提供
あなたの本棚 天晨堂

編集協力
株式会社あいゆう広告

素材提供
彦根市
彦根観光協会

2023年2月発行
2024年2月改訂版

彦根創業の平和堂と、彦根市に拠点工場を持つキリン、ブリヂストンは、連携して地域を笑顔にする取り組み「彦根発、笑顔いっぱいプロジェクト」を、2014年より展開しています。
今回の「彦根かるたまっぷ」は、高校生のアイデアをもとに、滋賀大学生が企画・製作を行い、3社のサポートにより実現しました。

笑顔倍増宣言
彦根発 笑顔いっぱいプロジェクト